

にしむらいせき 西村遺跡

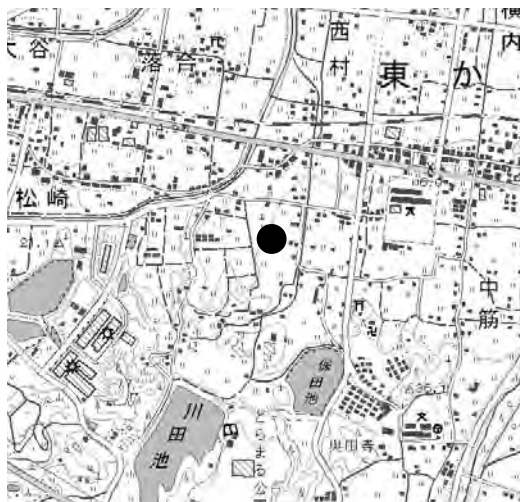
西村遺跡は東かがわ市西村に所在する遺跡であり、楠谷川を挟んで東西に広がる。今年度は楠谷川の西側部分を調査し、弥生時代前期末～中期初頭の集落跡と河川、古代の集落跡を検出した。今年度対象地の立地を俯瞰すると、南北方向に延びる丘陵の東斜面部に所在する。この東側に先述の楠谷川が北流しており、対象地東半はこの氾濫原上に立地する。一方、西半は丘陵上に相当するが、後世の土取によって丘陵が大きく削平され平坦化している。そのため、遺構はほぼ皆無である。残存する遺構面は大きく2面に分かれ、第1面は中世～古代、第2面は弥生時代中期初頭に位置づけられる。

古代から中世（第1面）

中世の遺構は対象地の北東隅に集中し、溝・柱穴・井戸を確認した。溝は大小2条が東西方向に掘削される。主軸方位はE11°Nを測り、概ね周辺の地割に近似する。検出部中央付近では溝幅が広がり、溝底部も深く掘り下げられており、水を滞留させる機能を持た

せていた可能性がある。東端は調査区東端付近で浅く消滅する。本来一定の幅・深さで掘削されたものが、後世に削平された結果と考えられる。柱穴群の検出状況からみて、対象地の北側に当該期の遺構が広がる可能性が指摘できるが、大溝の残存状況からみると、東へ広がる部分に関しては後世の削平により遺構の残存状況は芳しくないと考えられる。出土遺物が少量で詳細な時期は不明であるが、概ね14世紀代のものと考えられる。

古代の遺構は、東半ほぼ全てにおいて確認できた。対象地南辺・東辺においてやや密度が低くなっており、対象地の中心付近が遺構の集中する部分であると考えられる。検出した遺構は柱穴、溝状遺構が中心である。柱穴は長軸が約1m近い楕円形あるいは不整形な形状を呈するものが多い。大半の柱穴が柱材を抜き取られ、その際の抜き取り痕が埋没した形状を反映している。柱痕を留めるものがあり、概ね0.2mの太さの柱材が用いられたものが多く認められた。比較的残存状況の良好なものが多く、深さが0.5m以上残存するものが多く認められた。これらの柱穴群は規則的に配置されており、大型の建物を構成すると考えられる。調査時には5棟の大型建物を含む10数棟の建物を復元していたが、現在柱穴の組み合わせを再検討している。溝状



第2図 遺跡位置図（1 / 25,000）



写真1 中世遺構群（溝状遺構より右側）

遺構については幅広で浅いものがほとんどで、上層は後世の削平の影響を受けていると考えられる。いずれの溝状遺構も直線的に掘削され、部分的に直角に屈曲することから、区画施設として掘削された可能性が高いが、建物を区画するのか空間を区画するのか、今後の検討課題として留意すべき点である。これらの遺構はいずれも概ね10世紀代を中心とした遺物が埋土中に含まれ、当該期のものであると考えられる。なお、これらの遺構は小片化した土器を多数含む最低2層に分層可能な包含層を切り込んでおり、建物を建てる前に整地を行った可能性が想定できる。

遺物については土師器・須恵器・黒色土器の供膳具を主体とし、若干の煮沸具を伴う。これらとともに、灰釉陶器碗・壺、緑釉陶器碗といった搬入土器や円面硯・風字硯・転用硯が小片で出土している。また、漁網用土錘が約100点と目立って出土している。なお、特筆すべきものとして鍛冶炉・溶解炉の存在があげられる。鍛冶炉は8基確認でき、うち1基からは碗形滓が原位を保って出土した。これ以外の残存状況は不良である。炉壁などの構造は削平により残存しないものの、周辺の包含層から焼けた面を持つ土壁片が出土しており、これらが炉壁であった可能性が考えられる。また、整地層からは鉄滓・銅滓の他、小型の鉄製品・銅製品が出土している。製品類に関しては素材として搬入されたものである可能性が考えられる。



写真2 対象地中央部全景



写真3 対象地東半部全景



写真4 鍛冶炉・溶解炉



写真5 溝状遺構遺物出土状況

弥生時代中期（第2面）

第2面は、少なくとも弥生時代前期末までに埋没した河道の上面に形成される。竪穴住居跡1棟の他に土坑7基・柱穴5基を確認した。竪穴住居跡は直径7.5mの円形を呈し、深さは約0.3m程度残存している。断絶があるものの概ね全周に壁溝が巡っていたと考えられる。ベッド状遺構は確認できなかった。床面上で10基の柱穴と1基の中央土坑が確認でき、柱穴のうち3基からは柱材が確認できた。また、床面上で小型鉢などの土器類やサヌカイト製石器類が少量出土した。他に、北側において大型の落ち込みを、南側においては土坑群を確認しており、他の住居跡であった可能性が想定できる。昨年度調査した楠谷川東側でも当該期の溝状遺構が確認できている。概ね弥生時代中期初頭のものであると考えられる。なお、竪穴住居埋没後は再度旧河道による埋積があり、ある程度平坦化した後に第1面が形成されたと考えられる。埋積の時期は竪穴住居跡の時期と大きく差はないと考えられる。

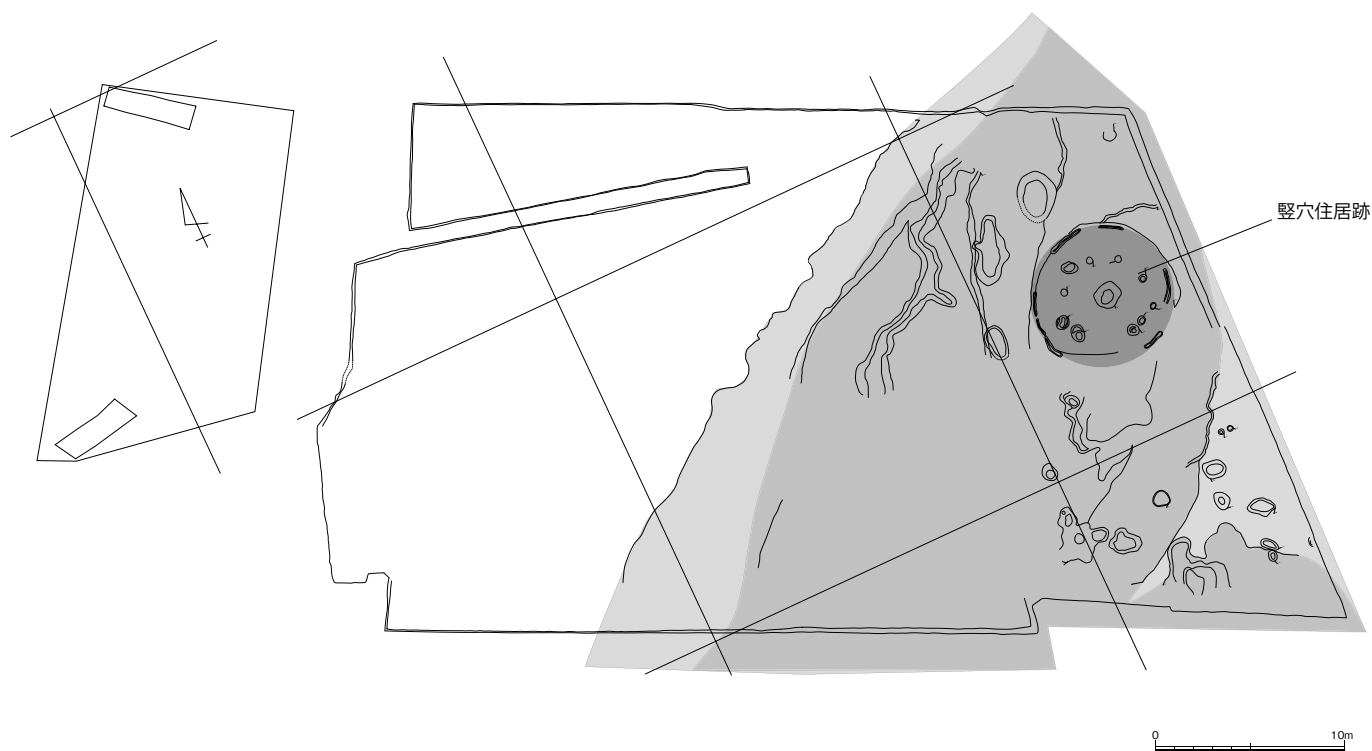
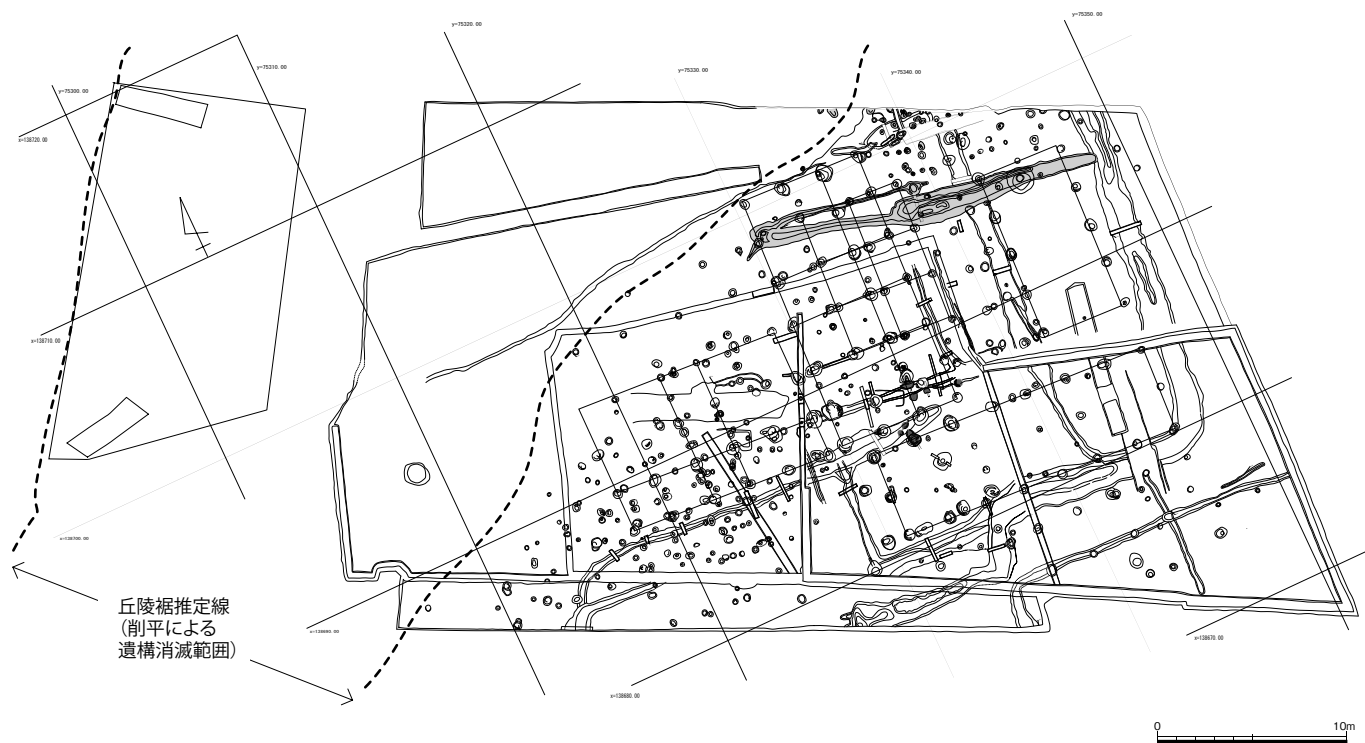
最後に各遺構面について簡単にまとめておく。第1面では大型建物と区画溝を伴う比較的整然とした柱穴群が確認できており、概ね10世紀代のものであると考えられる。これらは各柱穴の規模が大型であること、建物を建てる際に整地を行うことなどから一般集落とは異なる性格をもつものと考えられる。また、鍛冶炉・溶解炉の存在から金属器生産に関わりがあり、遠隔地産の陶器や硯の存在から有力な識字層に関わる存在をうかがうことができる。また、遺跡北方約300mを推定南海道が通ることから、西村遺跡はこれに近接した物資の流通や生産に関与する地域の有力者の拠点としての性格を考えておきたい。第2面については同時期の周知の埋蔵文化財包蔵地「落合遺跡」に近接しており、弥生時代中期初頭における当該期の集落を考えるうえで重要な成果となる。



写真6 竪穴住居跡



写真7 竪穴住居跡主柱穴内柱材



第3図 遺構平面図 上段：第1面、下段：第2面（S = 1 / 400）